

14章 津波イメージと避難のタイミングに関する考え方

津波はほとんどの場合、大きな揺れを感じて、一定の時間をおいて来襲する。しかし、揺れを感じて、津波を思い浮かべることは簡単ではない。また、津波を思い浮かべることができたとしても、ほとんどの人は津波を自分で見たことがないので、それがどのようなものであるか理解することが困難である。多くの人は、子どもの頃、聞いた津波の話やテレビや新聞で見た津波から、津波とはこんなものではないかというイメージを抱くことになる。その津波イメージが来るべき東南海・南海地震津波への対応に際して、どの程度有効であるのか、あるいは逆に障害となるのか見極める必要がある。同時に、津波への対応行動の基本は避難であるが、どのタイミングで避難することが正しいと考えているのかも重要なポイントである。そして、災害すべてに共通することであるが、「正しく恐れる」ことができているのかが問題となろう。

ここでは津波危険地区の4県県民が津波に関して、実際にどのような認識をもっているのかについて、3つの領域―津波来襲のイメージ、津波避難のタイミング、津波の怖さの実感―に分け、アンケート結果に基づき分析する。

(1)津波来襲のイメージ

津波来襲の様子は、津波毎に、あるいは地形等の影響を受け地域ごとに大きく異なるが、多くの津波に共通することも少なくない。また、不確実性がある場合には、最悪のケースを考えておく必要がある。ここでは、以下のような4つの津波来襲イメージを提示し、それらに対して、同意するか否かを尋ねた。具体的には「そう思う」、「まあそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の4つの選択肢から選んでもらう方法をとった。

- 1)大きな津波が来る前には必ず海の水が大きく引く
- 2)大きな津波は1回しか来ない
- 3)東南海・南海地震の津波はゆっくりと水面が上昇するようにやってくる
- 4)東南海・南海地震の津波は、巨大な水の壁のようにやってくる

1)と2)は一般的な津波イメージであり、両方とも間違った津波イメージである。3)と4)は東南海・南海地震津波に限ったイメージであるが、震源が近い巨大地震に伴う津波であるので、4)の方が正しいイメージと考えられる。

【引きから来る、1回しかこない】

まず、1)と2)についての調査結果をみると、図14-1に示したように、「大きな津波が来る前には必ず海の水が大きく引く」というイメージに同意した人（「そう思う」または「まあそう思う」と回答した人、以下、同意率と呼ぶ）が4県平均で実に78.5%と高い割合になっている。「稲むらの火」をはじめとする各地の津波伝承の中で押し波の前に引き波が来たということが盛んに言われた結果でもあろう。このような誤解は、県による違いが多少みられ、同意率は、もっとも高い和歌山県で83.0%、徳島県が82.7%、高知県が76.8%、高知県71.9%となっている。東南海・南海地震への関心が高く、基礎的知識を多くもっている人ほどこのイメージを強くもっている点が問題と考えられる。

「大きな津波が来る前には必ず海の水が大きく引く」というイメージを強くもっている

のは、年齢が高く、居住年数が長い人、漁業従事者、子どもの頃に地震や津波の伝承を受けた人であり、このような「津波は必ず引きから始まる」という間違ったイメージがきわめて根深いものであることを示唆している。

「大きな津波は1回しかこない」という間違ったイメージをもっている人は、4県平均でも10.8%と非常に少なく、県による差も小さい。

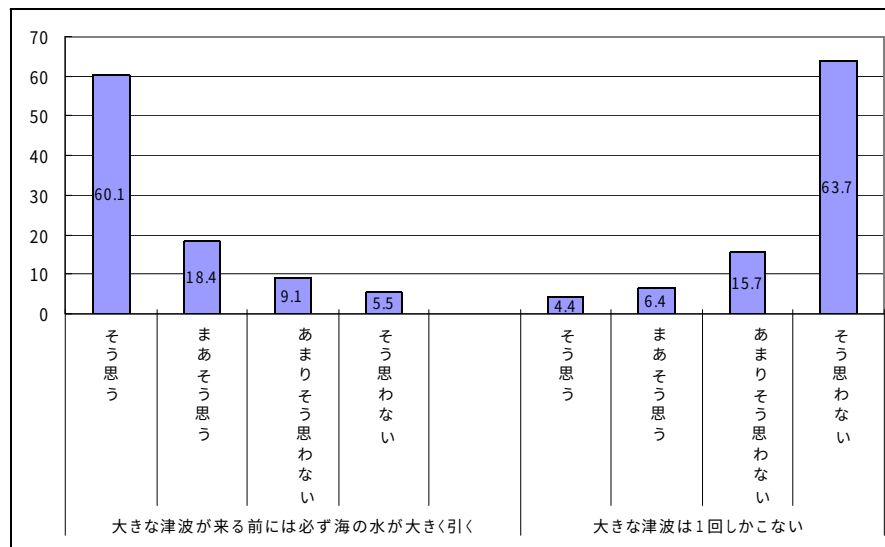


図14-1 間違った津波イメージへの同意、不同意（単位 %）

このイメージへの同意率は、東

南海・南海地震への関心が高く、切迫感を強くもち、基礎的知識が多い人ほど低く、よく知っている人ほど正しいイメージをもっているので問題は少ない。

【東南海・南海地震津波の来襲の様子】

東南海・南海地震津波が来襲する様子として、2003 年十勝沖地震時の津波やチリ地震津波でみられたような「ゆっくりと水面が上昇する」タイプを想像している人と「巨大な水の壁がやってくる」タイプを想像している人がいるが、今回の調査では、図14-2のように、「巨大な水の壁がやってくる」正しいタイプを想像している人が多くなっている。4県平均でみると、「巨大な水の壁がやってくる」の同意率は 67.6%で、ほぼ3人のうち2人は正しい津波来襲イメージをもっていると言えよう。県による違いもみられ、もっと

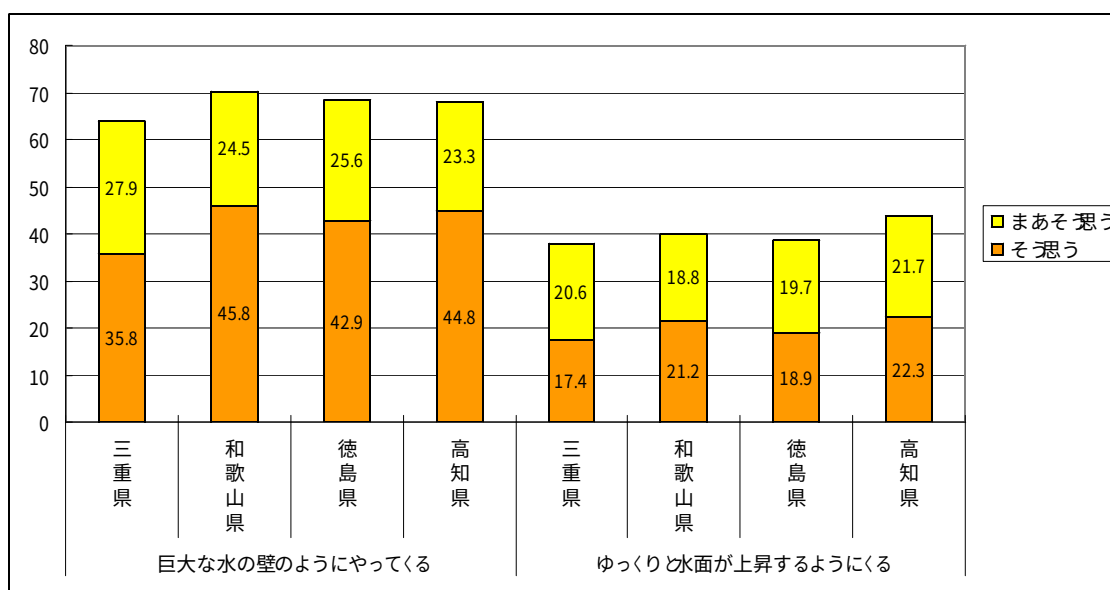


図14-2 東南海・南海地震津波の来襲状況イメージ（単位 %）

も高い和歌山県では同意率が 70.3%と 7 割を超え、徳島県(68.5%)、高知県(68.1%)と続き、三重県では 63.7%とやや低くなる。

一方、「ゆっくりと水面が上昇する」というイメージへの同意率は 4 県平均で 40.1%と少ない。これは一方では、巨大な水の壁というイメージをもちながらも他方でゆっくり上昇というイメージも併存させている人がいるためである。

(2)津波避難のタイミング意識

津波避難の原則は、「強い地震の揺れが収まったらすぐに」というのが鉄則であるが、そのような認識はなかなか浸透していない。今回の調査では、津波避難のタイミングに関して、以下の 3 つの考え方を提示し、その賛否を尋ねた。

- 1)大きな揺れに襲われたら、他の家族のことはかまわず、自分だけでも急いで高台に逃げるべきだ
- 2)津波警報が出てから避難しても間に合う
- 3)海の水が大きく引いてから避難しても間に合う

1)は三陸地方で「津波テンデンコ」と呼ばれる考え方であり、「家族一人ひとりが助かるには、それぞれがそのとき居た場所から直近近くの高台にテンデンバラバラに避難しなさい」というものであり、これがもっとも多くの命が助かる方法だというのである。しかし、この考え方は、図14-3からもわかるように、ほとんど支持されおらず、4 県平均でも同意率は 15.7%と 7 人に 1 人しか同意していない。

もっとも多くの人が同意しているのは、「津波警報が出てから避難しても間に合う」で 4 県平均で 40.2%が同意している。しかし、これに対する不同意率は 51.4%と半数を超えており、多数派ではない。これについては県による差が小さい。

「海の水が大きく引いてから避難しても間に合う」に同意している人はさすがに少なく、4 県平均で 13.6%に留まっている。

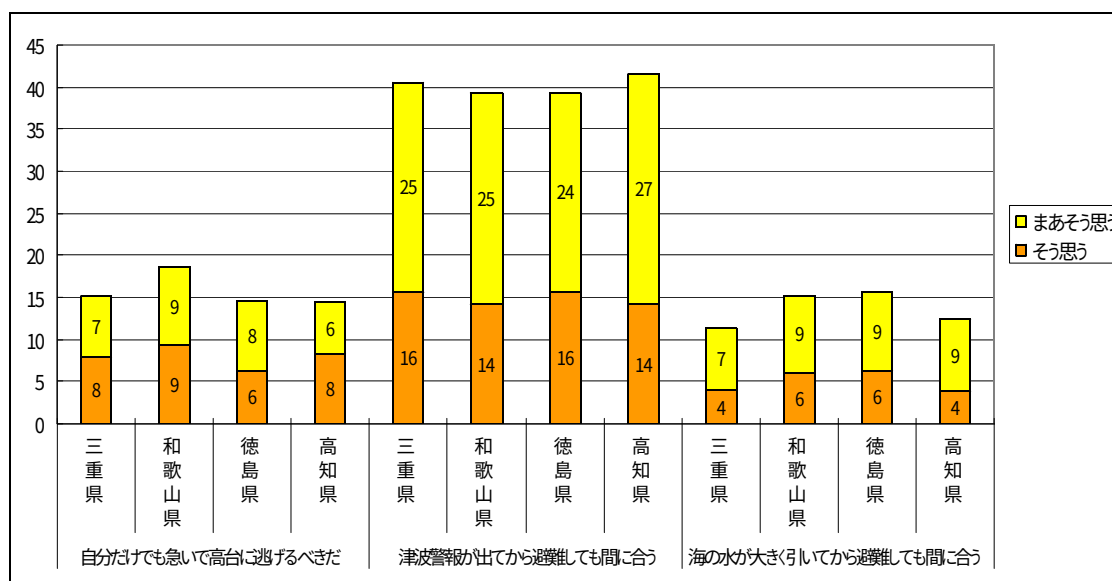


図14-3 津波避難のタイミング等に関する考え方 (単位 %)

(3)津波の恐怖感

津波災害は一生に一度体験するかどうかという稀な自然災害であるため、その怖さを実感するのが難しい。そこで、津波の怖さをどの程度、実感できているのかを尋ねた。質問としては、「津波は怖いと言うけれど、自分にはピンとこない」という意見を提示し、それへの同意・非同意を尋ねた。

その結果、図14－4に示したように、4県平均で40.3%の人が同意し、非同意の人は50.1%であり、賛否はほぼ拮抗していると言えよう。県による違いもみられ、三重県が同意率45.4%でもっとも高く、徳島県が41.7%、高知県が38.7%、もっとも低い和歌山県は35.6%となっている。

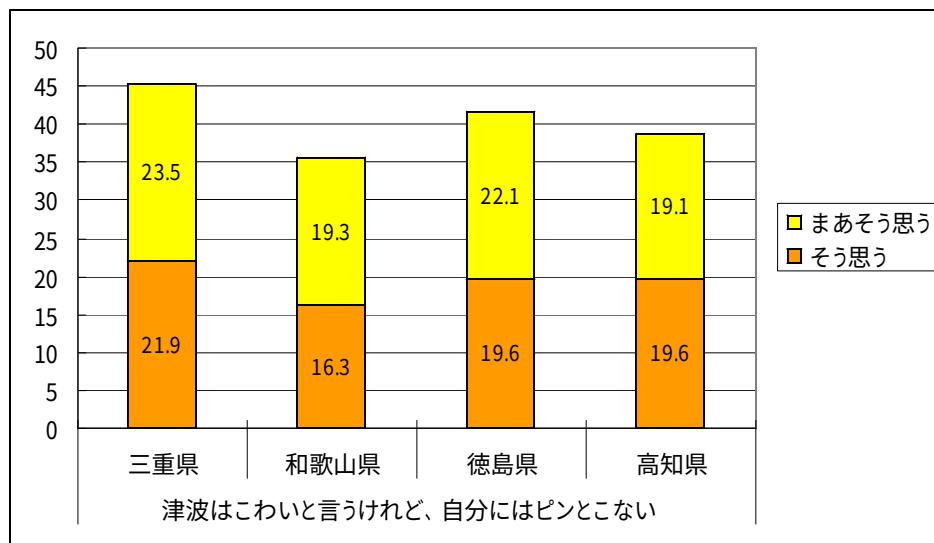


図14－4 津波への恐怖感を実感できるか (単位 %)